

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530640

研究課題名(和文) 岩手県内の樺太引揚げ者のファミリーヒストリー 住宅困窮層の実態と支援の比較研究

研究課題名(英文) Comparative study of the actual situation and the support of the family history of the Karafuto repatriate in Iwate

研究代表者

麦倉 哲 (Mugikura, Tetsu)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：70200235

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本課題の研究目的は、岩手県内の樺太引揚げ者のファミリーヒストリーを社会的に調査研究するものである。岩手県は、無縁故の引揚げ者を受け入れた県として注目されるが、岩手県に定住した引揚げ者の中には、有縁故として引揚げたファミリーもみられるということである。この人たちは、家族親戚の縁故を、たよったものであるが、この人たちの場合も無縁故者と同様に、住宅に困窮しているという点で共通している。帰国後の引揚げ者の生活の困窮は、少なからず長く続いた。戦争による教育機会が閉ざされたために、引揚げ者は、しばしば、底辺の労働者の地位に置かれたのではない。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study investigates the family history of the Karafuto repatriate in Iwate sociologically. Iwate accepted a lot of unrelated repatriates. In the repatriate who settled down in Iwate, there was the family with the relative. These people lived in the house of a family and the relative. However, these people were troubled with a house in the same way as an unrelated person. Life was considerably hard after return home for a long time to Japan. Because war happened, education was not received. Therefore, as for these people, the repatriate became a worker of the base.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：樺太引揚げ者 ファミリーヒストリー ライフドキュメント 生活困窮

1. 研究開始当初の背景

太平洋戦争後に、樺太から岩手県へと引揚げてきたファミリーは、樺太の地でどのように定着し、またどのような経過を辿り引揚げ岩手県へと落ち着いたのだろうか、そしてまた、その後さらにどのようなファミリーヒストリーを辿ったのであろうか。岩手県は、全都道府県のうち北海道に次いで多くの樺太引揚者を受け入れてきた。しかし、そのファミリーの変遷と引揚げ者支援の政策過程は、研究としてほとんど手付かずである。岩手県への引揚げ者は、主に無縁地の者であり住宅困窮層であった。ファミリーの変遷をドキュメントとして掘り起こし、マイノリティや貧困層としてどのような社会的処遇を受けてきたのかを明らかにし、居住支援の面からも比較研究したいと考えた。

研究代表者たちは、2010年度から、盛岡市営住宅住民を対象とした、地域生活と地域課題および健康状態に関する調査に着手していた。調査の結果でこれまでに明らかになったことは、公営住宅居住者の中に、樺太からの引揚げ者が少なくないことのほか、公営住宅入所者の収入はきわめて限られており、低家賃の公営住宅があることで救われている生活困窮層が多いということであった。

このうち樺太から岩手県への引揚げ者は、戦後、応急住宅として、主として引揚げ者用に提供された兵舎を改造した壕舎で、1970年前後の全国的な団地建設の時代に至ってようやく、少しモダンな公営住宅へと建て替えられ、引揚げ者もそこへ優先的に入居できた。その公営住宅は今や老朽化が進み、低家賃の住宅として存在意義が大いにあるものの、建て替えの時期を迎えている。一時的な住処や終の住処をめぐる、社会史の激流に飲み込まれてきた引揚げ者ファミリーは、新たな転機を迎えていた。

2. 研究の目的

本課題の研究目的は、岩手県内の樺太引揚げ者のファミリーヒストリーを社会的に調査研究するものであり、住宅困窮の実態と支援政策の効果について比較研究するものである。この研究は、現代史の一側面として失われてはならない社会的事実を掘り起こし、社会学の観点から、マイノリティや居住困窮者への支援のあり方を、東京都や沖縄県における住宅困窮問題と比較考察し、実態面と政策効果の点から比較研究をして、社会的な知見を得ようとするものである。

本研究の学術的な特色の第一は、引揚げ者が経験したファミリーの歴史について、実証的に明らかにすることである。ここ数年のうちに社会的な調査をしておかなければ、こうしたきわめて異例の経験を経てきた対象に関する重要な事実が歴史から抜け落ちてしまうからである。戦勝と敗戦の歴史に翻弄された無縁地の樺太引揚げ者として、権利弱者

や居住弱者として、生存の基盤を喪失したファミリーとして、国内外の政治の影響を最も受けた一団の例がここにある。しかし、この人たちの経験した社会的事実、これまで十分に学術研究の俎上にあがってこなかった。そのために、実態の把握も不十分であり、かつまた生活過程についての、社会的な類型化が試みられてこなかった。本課題において、社会学的研究としてファミリーヒストリー調査を実施することにより、個々人の人生や生存の基盤がどのような影響を受け、変遷を辿ったかを解明したいと考えた。

第二に、ファミリーヒストリーの視点の意義である。1945年から1948年、10代であった当事者ファミリーは現在、70歳代後半から80歳代に達している。この間のヒストリーは長期に及び、こうした当事者の先代から続き、当事者の子孫へと展開するファミリーヒストリーがそこにある。ソ連の進駐を受け、悲劇的な被害を被ったというドキュメンタリーは記録されている。最北の地から命からがら引揚げて、引揚げ時から引揚げ直後までの苦難のドキュメントなどである。しかし、こうした人びとの経験は、戦中や戦後直後の歴史の断面ではなく、またある特定の1世代の人生におさまるものでもない。こうした経験を社会学研究のテーマとし、ファミリーのヒストリーに注目することにより、太平洋戦争前から戦中、そして引き上げから定着後、さらに、安定、世代継承、老後、という長いスパンのヒストリーとして究明できるのである。社会的視点で研究する目的は、殖民そして引揚げという、政治状況に置かれ続けてきたファミリーを、生きられた側から、また家族のつながりとして、複数世代の経験として位置づけて、聞き取りをし、多様なドキュメントを収集するためである。

第三に、他の居住弱者との比較研究の視点である。本課題は、樺太引揚者をひとつのマイノリティと見て、他のマイノリティである、満州からの引き上げ者、他の被差別者、一般の生活困窮者、エスニックマイノリティ、ホームレスなどのマイノリティが経験する、生活上の困難性と比較考察することを意図している。中央と地方の行政府が、基本的人権として取り組むべき政策効果の質を、社会的に困窮の実態に即して、具体的に比較検討することに意義がある。

引揚げ者のファミリーは、提供・あっせんされた居住施設に根付き地域に定着し、あるいはそこから新天地へさらに移転していったようだ。各地における居住に関する支援政策が、全国の多様なマイノリティ層に対して、シビル・ミニマムを達成できているかどうか、学術的に比較検討する時期にきている。

3. 研究の方法

研究方法は多岐にわたる。第一に、資料収集系の研究計画として、文献研究、資料収集及び分析、各種・各地の行政資料の収集・分

析、ライフドキュメントに関する資料収集分析である。

第二に、当事者を対象としてフィールド調査として、岩手県盛岡市の公営住宅住民をはじめ盛岡市在住の樺太引揚げ者への聴き取り調査を実施した。第三に、岩手県の他の自治体、具体的には岩手県岩手町内の開拓入植地区の引揚げ者の調査を実施した。第四に、盛岡市青山地区関連の各種リーダーインタビューおよび岩手県や盛岡市における住宅支援施策に関する関係者への聴き取り調査の実施である。第五に、東京都と沖縄県における住宅困窮者への支援政策に関する調査の実施である。

4. 研究成果

本課題の成果としては、『岩手県内の樺太引揚げ者のファミリーヒストリー 住宅困窮者の実態と支援の比較研究1<資料編：インタビュー調査結果>』（研究代表者麦倉哲、2014年3月31日）を刊行している。

成果報告書の内容は、研究ノートという位置づけにあり、今後の調査を進めるなかで、考察を深めていきたい。そうした前提ではあるが、樺太から岩手県に引き上げてきたファミリー・ヒストリーから、若干の考察を加えたい。

第一に、岩手県は、無縁故の引揚げ者を受け入れた県として注目されるが、岩手県に定住した引揚げ者の中には、有縁故として引揚げたファミリーもみられるということである。この人たちは、家族親戚の縁故を、たよったものであるが、この人たちの場合も無縁故者と同様に、住宅に困窮しているという点で共通している。しかしながら、有縁故であるがゆえに、住居の手当てを受けられないという立場に置かれた。具体的には岩鷲寮には、有縁故の引揚げ者は、入れなかったのである。

第二に、青山町の中には、引揚げ者住宅「青山寮」（1946年開設）と「岩鷲寮」（1947年開設）が開設されたが、樺太からの引揚げ者は、後者の岩鷲寮に入った。満州からの引揚げ者も、同様に、無縁故の引揚げ者であったが、受け入れ当初から、仕分けられたようである。

第三に、敗戦から引揚げのまでの労苦は、すべてのファミリーに共通して、きわめて深刻でたいへん厳しいものがうかがえるが、その厳しさの原因は、ソ連兵の侵軍だけではない。日本軍や憲兵によるものや、出入国の手続きや扱いによるものも大きな要因であることがうかがえる。日本の官憲による、朝鮮人虐殺があったかどうかは、論争の一つの焦点となっているが、今回調査したファミリーの中には、虐殺があったことを身近に感じたことが語られた。敗戦後は、女性が恐怖を感じ、男装したり、山間地に疎開したりした。また、子どもは、出航前の収容所の便所が恐怖で、深く掘られた汲み取り式のトイレから落ちたならば、命を失うという恐怖の中で、

出航船を待っていたことがうかがえた。

第四に、少なくとも今回の調査で知る限りにおいて、ソ連兵とは違って、戦後に南下して、日本人住宅に入居してきたソ連（ロシア）の民衆は、おおらかで友好的であったようだ。戦争が、両国民を引き裂き、政治のレベルでは、互いに侵略者と非難し合ったが、民衆レベルでは、十分に共存できることがうかがえた。戦争と政治が、両国民を引き裂いたままに、放置したのである。

第五に、帰国後の引揚げ者の生活の困窮は、少なからず長く続いた。戦争による教育機会が閉ざされたために、引揚げ者は、しばしば、底辺の労働者の地位に置かれたのではないが。確かに、引揚げ者の中には、成功した人の例もみられるが、相対的には、貧困の階層に固定されることのほうが多かったのではないかと想像される。

次に、ライフドキュメントの成果の一部を示す。

MTさんのケーススタディ。

（1）プロフィール

1931年生まれ、女性。北海道手塩郡生まれ、本川上へ移住した。（両親とも宮城県栗原出身）

（2）終戦までの樺太での生活

5歳で両親と妹とともに、樺太に移住した。移住後、第2人が生まれた。最初、父は本川上（豊原の近く）の開拓団に入植したが、樺太鉄道に勤務。母が病弱で豊原にあった庁病院に電車で通院した。住まいは官舎だった。食糧事情はあまりよくなかった。コメは非常食として押し入れにしまっていた。主食は、じゃがいも、かぼちゃ、そばが多かった。家の近くで、野菜を育てた。タラ、コマイ、ニンシ、カラフトマスなどが豊富で、父が電車に乗ってよく海に獲りに行った。塩漬けにして土中に保存した。身欠きニンシをよくおやつで食べた。シンガポール陥落（1942年2月）のとき、酷寒のなか、樺太でも提灯行列が行われたことを覚えている。高等小学校を卒業し、中学には進学しなかった。

（3）終戦から引揚げまで

密航船で北海道にわたらないといけない。このまま住むとロシア兵に殺される、女性は髪を切って男装しなくてはいけないなどさまざまな噂が流れた。ロシア兵は恐ろしかったが、目にみえた被害はなかった。日本の憲兵によって、スパイの容疑で朝鮮人を川原につれて行き射殺したという話を聞いた。そうこうしているうちに、ソ連の農民が南京袋一つもってやってきた。日本人が置いていった生活物資があるので、それを当てにしたのだろう。農家は、すぐに引き上げることができたが、鉄道員の家族は、ソ連の国策かどうかで、帰国が遅れた。

帰国するまで、ソ連人とひきつづき官舎でいっしょに住んだ。彼らはおおむね親切であった。石炭を上川炭鉱で分けてもらった。商店に並んで、パンを買ったのを覚えている。

国民学校を卒業したのち、15、6歳のころ、鉄道の除雪によく駆り出された。徴用で親から離れて真岡のニシン場で働いた。海はニシンで真白になるくらいだった。真岡での住まいは、引揚者が住んでいたもので、タンスや瀬戸物などの家財道具はすべて壊されていた。

(4) 引揚げのとき

1949年の5月に、貨物車に押し込められて、真岡に移動した。そのとき、リュックにつめるだけ、家財道具をつめた。それを思い出すので、いまだにリュックが嫌いだ。土間のテントで2週間くらい過ごした。船中は、ごったがえしで、シラミやノミだらけだった。函館到着後も4、5日上陸できなかった。上陸後、頭からDDTの散布を大量に受けた。

(5) 帰国後

栗原にある父の実家を訪ねた。父は国鉄の貨物係の職を見つけた。しかし、居心地が悪く、盛岡で引揚者の受け入れ先があると聞き、同じ境遇の人たちといっしょのほうに住みやすいだろうと思い、引っ越した。青山二丁目は騎兵隊跡地で、満州・台湾出身者が、青山三丁目は歩兵隊跡地で、樺太出身者が多く移り住んだ。父は再び、国鉄で職を得、定年までそのまま勤めた。就職難で、職を得ることができず、2年間洋裁の職業訓練所に通って、短い期間だったが洋裁店に勤めた。母親が病弱だったので、家事をした。厨川にある種畜牧場(現東北農業試験場)に七輪用のカラマツの枝をよく取りに行った。家族パスを使って、栗原にある母親の実家によく食料をもらいに行った。

兵舎跡地は約10畳の板の間をベニヤ板1枚で区切られただけなので、隣がお茶を飲むのもわかった。押入れと窓が一つずつあり、布団はわらでできていた。煙突が低く、ストーブの煙が逆流することもあった。廊下で七輪を使って煮炊きをするので、ときどき火事がおこった。トイレは男女共用で、風呂もなかった。馬小屋を改良してできた青山小学校に仮設のふるを作って、先生が児童を入れたこともあった。

2年ほど兵舎跡に住み、近くにできた「いろは住宅」というアパートに移った。そこも風呂なしで、銭湯に通った。1952年か53年に、青山町の住宅兼店舗の物件を2万円で購入した。病弱な母親に駄菓子屋でもさせようと、父親が考えたのかもしれない。父は87歳、母は84歳で、そこで亡くなった。

25歳の時に4歳年下の地元の男性と結婚し、最初は同じ町内のアパートに住んだが、青山市営住宅ができたとき(1965年、昭和40年頃)引っ越した。子供は7人できた。夫は、東京に出稼ぎに出て、60歳近くまで、高速道路などの建築現場で働いた。当時は、高度成長の時代で、秋田・青森の人たちといっしょにでかけ、仕事が非常に忙しく、帰省は盆と正月くらいだった。自らも、子供を保育園に預けて、盛岡駅近くの建設会社で働いた。

現在は夫婦合わせて、ひと月10万円程度の年金で生活している。

本課題研究から引き出されるべき成果は多岐にわたる。今後は、さらに考察を深めて、学術論文に著してしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

麦倉 哲 (MUGIKURA Tetsu)
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：70200235

(2) 研究分担者

三井 隆弘 (MITUI Takahiro)
岩手大学・教育学部・准教授
研究者番号：20423840